

ネコノス文庫

[キ 1-3]

シリーズ 百字劇場

ねこラジオ

北野勇作



ネコノス

二階の物干しのすぐ前に裏の家との境のブロック塀があって、猫の通路になっている。とつとつと肉球を鳴らし、猫一匹分の幅の塀の上を猫が次々に歩いていく。夕方、交通量が増えると、後足で立って横歩きですれ違う。

離陸直前、娘の手から蛙を没収したのはキャビンアテンダントで、もちろん仕事だから仕方がないが、娘のテンションは急降下。責任を持って自然に還しておきますからね、とにっこり笑う彼女に、還すわけないよ、と娘。

おおああおお、おおああおお、
と何日か前から夜になるとうるさ
くて、まあそういう時期なのだろ
うが、それにしても猫と言うより
魔女の声だな、と塀の隙間を覗い
てみると猫ではなく小さな魔女た
ちが集会をしていた。

空き地に立つあの縦長の黒い板のまわりで集会を開いていた猫たち、最近になって道具を使うことを覚えたらしい。捨てられていた大工道具から工作機械まで、肉球で器用に使うのだ。そんな猫の手を借りに行く者も多い。

いつも歩いている道から一本外れたところに猫の多い路地を発見。家の隙間、屋根の上、物置の下、いたるところに猫の顔があつて、いやしかしいくらなんでもこれは多すぎるのでは、と首を傾げてブロック塀の上にいる。

けん玉に娘は夢中。最近は近所のけん玉名人に教わっているようだ。見る見る上達していろんなところひょいひょい乗せられるようになった娘の話によると、どうもそのけん玉名人、猫らしい。では、名人でなく名猫か。

ごろごろしゅっしゅとやってきた、あれが噂の蒸気猫。生きているのかいないのか、シュレディンガーの昔より、箱に秘めたるその実態。どこからともなくあらわれて、すべてを湯気で曇らせる。蒸気で出来ております。

照明機材を調節するためのキャットウォークが天井のすぐ下にあつて、そこを猫が歩いているのを見た。猫なんか入り込めるはずがない、と劇場スタッフは言うが、見た者は何人もいる。猫を演じている何かだったのかな。

猫に小判が付いている。額にある小判状の吸盤で貼り付いて、大物のおこぼれに与る。もともとは、そのためのものだったらしいが、そんなことせずとも猫は食べ物にありつけるから結局は使わないままで猫に小判である。

うちの小学校には七不思議がないから、みんなで考えることにしたんだ。娘が言う。最初に考えたのが、この学校には七不思議がない、という不思議。でも、そのせいで残りの六つを考えることができず困っているらしい。